荒尾市立府本小学校　校長便り　No.98

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年5月18日(月)

運動会の思い出

先週運動会の全体練習が始まったと思ったら、今週末は運動会ですね。このスケジュールで本番をこなすのですから、子ども達のポテンシャルの高さを感じます。私が小学生時代の運動会の練習はもっと多くの時間を費やしていたように思うのですが、同世代の皆さん如何でしょう？　運動家の練習の時期は教室での学習が極端に減り、運動場や体育館での活動が多くなって、私のような勉強嫌いの子どもからすればストレスフリー？の時間が何とも心地良い季節でした。我々の頃は秋の運動会（10月初旬）が主流で、カラッとした気候の中、屋外で活動しても、今のように熱中症等の心配もありませんでした。とても楽しく充実した時間でした。

春開催の運動会は暑さが問題になっています。特に小学校の運動会は梅雨の前、子ども達の体が暑さに対応できず、熱中症のリスクが高いのです。それでも熱い情熱で練習に挑む子ども達、今年の運動会も感動の場面に会えそうです。

《雑感》「積み重ね」

お世話になった先生のお話の中に次のような一節がありました。ご紹介します。

「朝、通勤していると黄色い帽子をかぶり、大きなランドセルで元気に歩く小学校一年生の姿を見かける。雨の日には、これに加え傘をさすこととなる。毎日の登下校には、子どもたちの生きる力を育てる要素がたくさん含まれている。体力の向上はもちろん、暑さ寒さに耐える忍耐力、交通事故から身を守る危険予測・回避能力、自然を感じる力、地域の方に挨拶したり、友だちと話をしたりするコミュニケーション力。これから、梅雨や暑い季節を迎える。子どもたちの安全や健康を見守りながら、地域・家庭と連携してどのように取り組んでいくか学校の腕の見せ所である。授業日数は一年間で200日、9年間で1800日。スタートラインに立った子どもたちに、世界に羽ばたく力をつけさせる時間と方法は十分にある。」

私は小中学生時代の登校は基本的に徒歩でした。往復3．2㎞の道のりを月曜から土曜まで歩いていました。1年生の頃、途中にあった小さな水路が雨で増水していた時も、高学年のお兄さんやお姉さんと手を繋いで歩くこともありました。その様な経験の中で「生きる力」を身に付けていったと感じます。1日3．2㎞、これを200日継続したとして、640㎞、これを6年続けると3840㎞歩くことになります。毎日車で送り迎えの場合と前者では、心身ともに圧倒的な差が出るのは明白ですね。

最近は物騒な世の中ですから、一概に自動車による送迎がダメだとは言えません。しかし、危険予測・回避能力をご家庭で話題にして頂くだけでも、児童の意識は変わります。何らかの手立てによって、徒歩による登下校は可能になると思います。

梅雨に入ると、傘をさして登下校することが多いですが、私は我が子に対して、「雨の中の自転車登校は自分を磨く良いチャンスだ。」と言い聞かせてきました。モチベーションアップのために、少々高めの自転車を買い与えてしまいましたが…。

シリーズ「自分を語る」#98

今日はカンボジアとペルーの研修先視察に行ったことに触れます。芦北町と九州産業交通です。

カンボジアの研修員、キンさんは学校の先生です。カンボジアを音楽教育によって立て直そうという志のある方でした。私も教師です、通じるものがありました。芦北町での生活に慣れた頃、芦北町国際交流推進室と、直接の研修先である湯浦小学校にお邪魔しました。湯浦小学校では、教育実習のような形で実習を行いました。ロンさんは音楽が中心の研修でしたので、常にピアノや鍵盤ハーモニカが傍らにありました。毎日練習をして、日本の童謡を数曲奏でることができる様になりました。それを、研修員発表会で披露し、感動を呼んだことは言うまでもありません。彼は、今でも熊本から持ち帰った鍵盤ハーモニカを大切にしているそうです。

ペルーの研修員、エリカさんはツアーコンダクターです。九州産業交通で研修しました。日本のツアー企画の良さについて学びました。さすがに日本国内だけでしたが、多くの観光地に向かい、そのサービスの高さや安全性について学んでいました。彼女は日本のツアーマネジメントについて学ぶとともに、ペルーの観光についてもプレゼンしていきました。帰国後、彼女はペルーの多くの観光地について日本の業者にPRしていました。現在、エリカさんはアメリカの青年と結婚して、ハワイに住んでいます。先日、メールが届きました。「澤田さん、いつかハワイに来てください。ハワイを案内します。熊本での生活はいつも忘れません。」と綴られていました。教え子達とのこのような交流が続くことに、喜びを感じています。

2名の留学生、6名の研修員は、私の大切な教え子です。私が担任している間、たくさんの思い出を作ってあげたいと考えていました。それぞれの研修先を相互視察しましたが、それだけでは物足りませんでした。思いついたのは、修学旅行、と。水俣の環境学習です。熊本の小学校教師であれば、長崎への修学旅行は当たり前ですし、水俣での学習は世界の国々でも活きるはずです。我々学校教師はそのことを強く自覚する必要があります。

さて、平成20年度の私の教え子8名達との水俣及び長崎の学習を企画し始めました。必要な手続きを終え、先ずは水俣市の視察へ。水俣の視察へは8名プラス、県のCIR、中国語とスペイン語の通訳、中国の国際交流員も同行しました。歴史を教訓として市政に多くの取組がなされています。行政の施策として全市を上げて組織的に取組が為されているので市民の意識も高く、環境や人権に関する問題に正面から取り組み、発信しているという印象です。水俣は風光明媚な地域ですが、水俣病による偏見や差別によって、市民が分断されたという歴史があります。市民の絆を再構築する「もやいなおし」が展開される、多くの学びを提供してくれる場所です。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）